

外国語教育とインターカルチュラリティ「異文化相互理解」：日米比較研究

ハティール・ガードナー／ディアンドレ・トンプソン

カリフォルニア州立大学モンレーベイ校

要旨

日本でもアメリカでも外国語教育は従来文法や暗記に重点をおいた教授法から近年コミュニケーションを重視した学習方法へ変わってきている。コミュニケーションアプローチで大事なことはインターカルチュラリティ、つまり異文化を理解し様々な状況に応じてコミュニケーションができる能力である。これはグローバル化した今日の社会では欠かせないものである。この研究では日本とアメリカの大学生にアンケート調査を行い、自分が受けた外国語教育をどのように思っているか、その外国語教育を通してどのようにインターカルチュラリティが深められているのか、そして外国語教育が如何に学習者とその言語のコミュニティ、多文化社会に繋げるために役割を果たしているのか、等について探ってみた。その結果、アメリカの学生の方が日本の学生より外国語を楽しく勉強しているうえに、インターカルチュラリティの能力の向上にも注意がはらわれているため、日本の学生より自信をもってコミュニケーションできると答えた学生が多いことがわかった。それはアメリカでは外国語教育にその言語のコミュニティとの繋がりをもつようなプロジェクトやアクティビティが組み込まれていることにも起因しているようであり、アメリカの言語教育では総合的にインターカルチュラリティ能力の向上につながっていることがわかった。

はじめに

グローバル社会でとても大事な能力はインターカルチュラリティ、つまり異文化を理解し様々な状況に応じてコミュニケーションができる能力である。そのため、効果的な外国語教育が、ますます重要になっている。しかし、私達のリサーチによると、外国語クラスによってインターカルチュラリティを造るために最も効果的方法の一つは、話し・聞くことを通してコミュニケーション能力を高めることに集中するコミュニケーションティブ・アプローチである。だが、日本でもアメリカでも外国語教育は従来文法や暗記に重点をおいた教授法から近年コミュニケーションを重視した学習方法へ変わってきている。

このキャプストーンで私たちは、1)自分が受けた外国語教育をどのように思っている、2)外国語は、異文化に対する知識をどのように深める、3)外国語教育は学生と多文化社会を繋げるためにどのような役割を果たしていることを調べられた。

1. 研究の重要性

なぜこの研究をしたかという、それは、私たちがサービスラーニングの授業を受けた際、多文化の人々を結びつけ、平等さと公平性を大事にしなければいけないことを学んだことに基づく。また、インターカルチャリティが留学した際にとっても重要であり、日本とアメリカでの外国語教育ではその能力をつけるためにどのような教育をしているのかをもっと知りたいと思ったからである。また、私たちは、将来言語教育に携わりたいのでこの研究の結果を参考にしたいと思う。

2. 研究質問:

1. 自分が受けた外国語教育をどのように思っているか。
2. 外国語は、異文化に対する知識をどのように深めるのか。
3. 外国語教育は学生と多文化社会を繋げるためにどのような役割を果たしているのか。

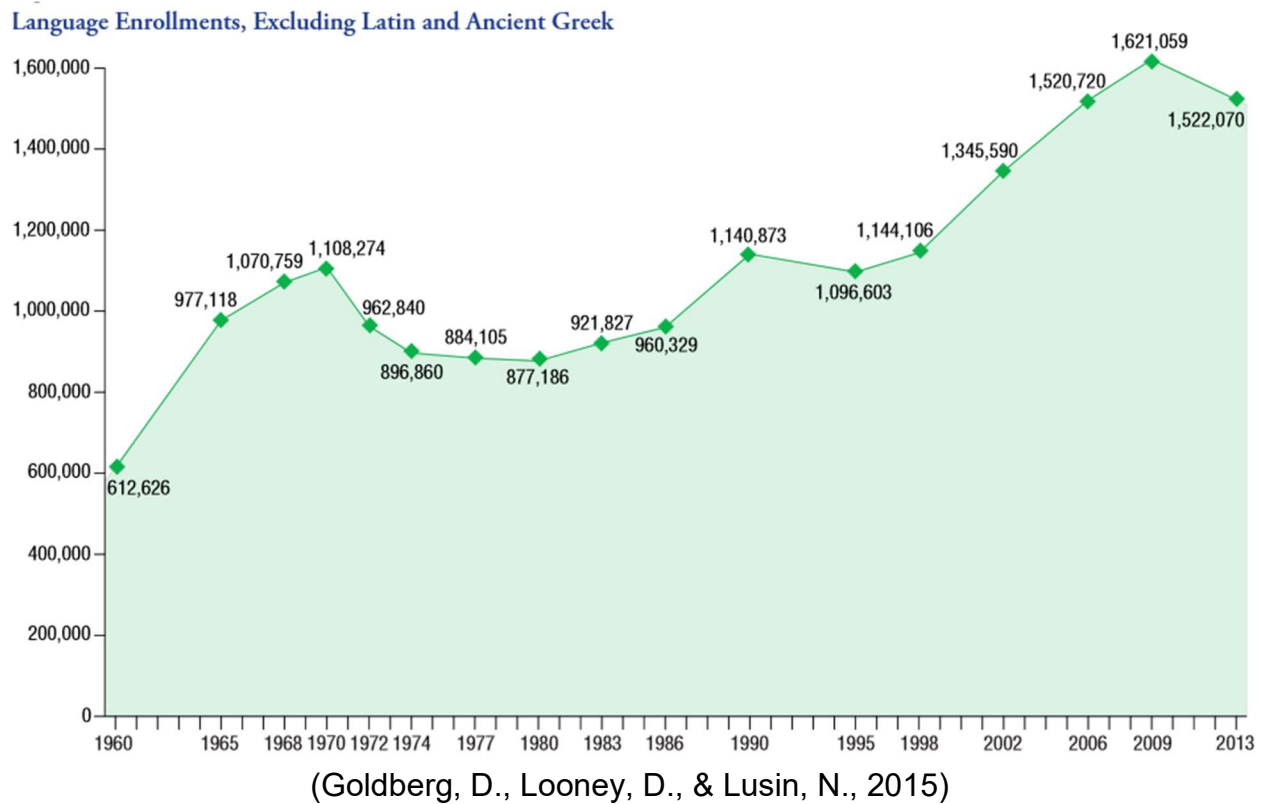
3. 研究背景

3.1. 外国語の履修登録の動向

アメリカでの外国語教育に関しては州によって異なり、どのぐらい履修しなければならないという制約はないが、アメリカの外国語教育には大学に入学するためには一般的に高校で二年以上の学

習が必要である。大学での外国語の登録者数は 2009 年まで増加していたが、それ以降は減少傾向にある (Goldberg, D., Looney, D., & Lusin, N., 2015) (図 1 参照)。一方、日本の場合は従来中学校三年、高校三年、そして、大学で一年から二年と少なくとも六年から八年間は英語を勉強する。しかし、グローバル社会に対応できる人材を作るため、日本では小学校からの英語の導入を奨励している。早い所では小学校三年生から始める。しかし、英語教育は大学に入るための入試試験に集中されるため、実際に使える英語教育とは異なるのが現状である(Tokyo International Communication Committee, 2016)。

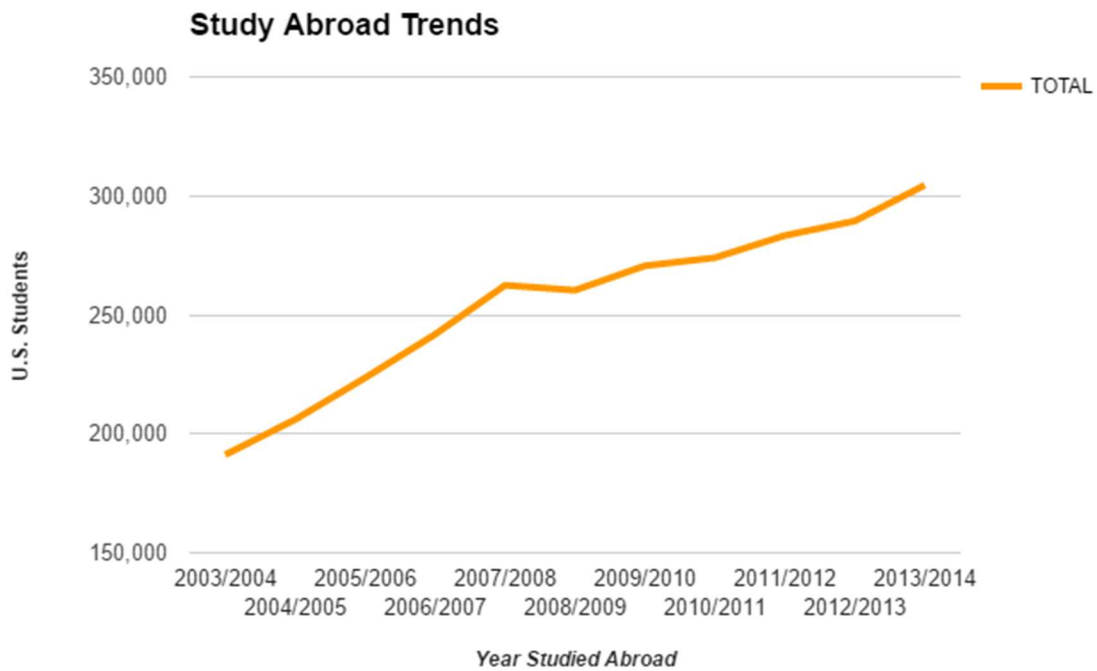
図 1：大学で外国語の履修登録の動向：アメリカ



3.2. 海外留学するアメリカの学生の動向

アメリカではどのぐらいの学生が海外留学するのだろうか。Institute of International Education によると 2013 年から 2014 年にかけて留学する人数が 5% 増えたという報告がある (図 2 参照)。

図 2 : 海外留学する学生の動向

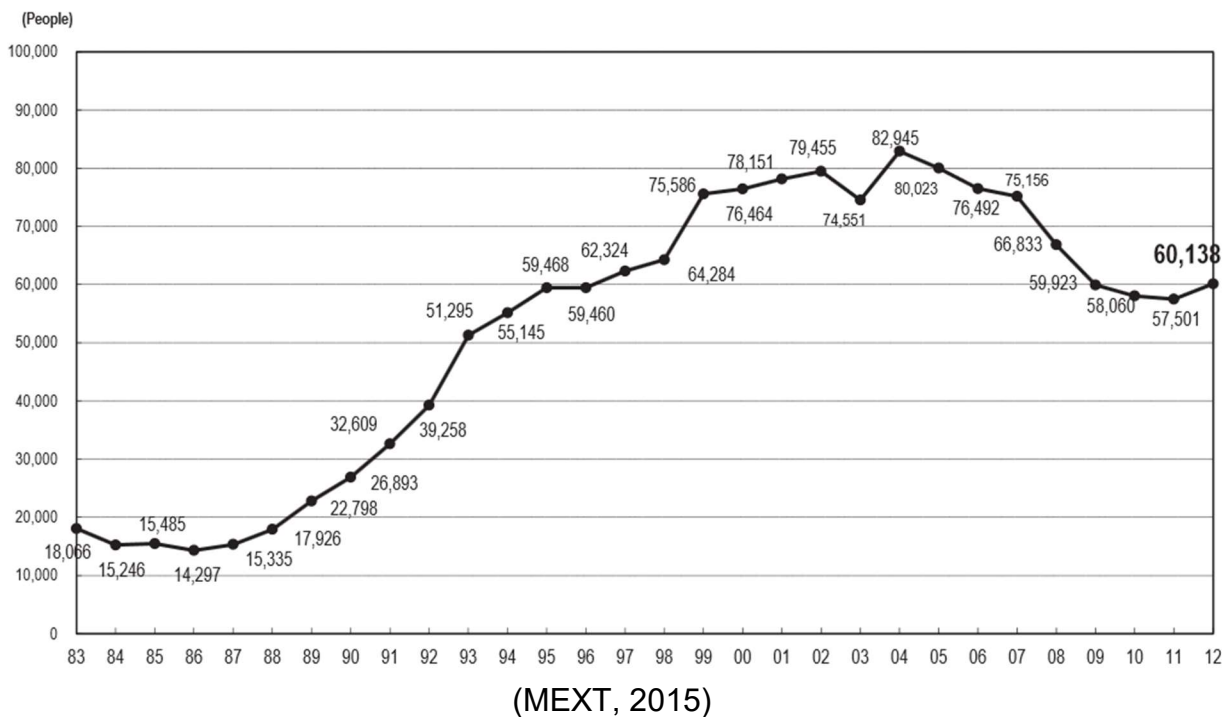


(Institute of International Education, 2014)

しかし、日本の場合は 2004 年から海外留学する学生の数が徐々に減って着ている。その理由には、経済不況などがあげられるが政府ではグローバル人材を増やすために 2020 年まで留学生を 12 万にまで増やす予定である(MEXT, 2015) (図 3 参照)。

図 3：留学する日本人について傾向

○ Trends in the Number of Japanese Nationals Studying Overseas



3.3. 外国語教育の変遷

さて、アメリカでは外国語教育はどのように扱われているのだろうか。外国語教育はオポチュニスト時代とディスマッシブ時代に分けられる。1960 年代から 1980 年代まで、オポチュニスト時代は、言語は世界で活躍できる大事な能力として見られていたのが、1980 年代からのディスマッシブ時代には外国語教育はあまり重要視されなくなった (Ovando, 2003)。しかし、近年、再び外国語教育の

重要性が見直されてきた。それは、異文化に対する柔軟性とインターカルチュラリティの向上、世界での経済政策での勝ち抜き、国の安全のためと学力向上と問題解決する能力に貢献するという理由が挙げられる (The Benefits of Second Language Study, 2007)。

一方、日本では東京オリンピックを境に使える言語が必要だという認識が高まった。つまり、今まで文法や言語の構成を重視していたのでコミュニケーションの力が使えないことが明らかになった。そのため、1970 代年からコミュニカティブ・アプローチが重視されるようになった (Fast, 2014)。また、英語を話す母語話者を学校の授業に参加してもらうため、1989 年に政府は JET プログラムを発足しコミュニケーション能力を高め外国語教育の充実と地域の国際交流の推進を図る事業に力をいれるようになった (JET, 2015)。また、2009 年には英語のクラスは英語で行うべきだという考えが広まった一方、その実現には教師の養成も関わってくるため難しく現在策が練られている。また、2014 年から小学校でも英語を教えることが奨励されている (Fast, 2014)。

3.4. 外国語教育の変遷: 文法からコミュニケーションへ

アメリカも 1800 年代を文法翻訳中心の教授法であったが、1986 年に ACTFL のプロフィシエンシーガイドラインが全米に普及して以来、実生活で対話ができる能力、そしてグローバル社会での異文化で柔軟に対応できる人材の養成に力を入れるようになった。また、アドバンスト・プレイズメントテストはナショナルスタンダードが基本となっており、アメリカでの外国語教育には生教材が使われることが重要視されるようになった (Wells et al., 2013)。日本の場合、アメリカと同じようにコミュニケーションが重要だとし様々な計画を立てている。しかし、やはり日本の外国語教育では大学入試が目的

となっているため、テスト内容が読み・書き・聞く・話すの 4 技能に集中されていることがやはり外国語教育をコミュニケーション中心の内容に切り替えることは難しいようである (Shimizu, 2010)。

3.5 外国語教育 基準「アメリカと日本」

アメリカで使われているのが World Readiness Standards で 1996 年の National Standards に Common Core や 21 世紀のスキル等を取り入れ、このグローバル化した社会で通じる言語教育を目指したものである (The National Standards Collaborative Board 2015)。その目的は基準をもとに測定された国際的な感覚をもたらす能力と理解力を将来の仕事と経験に適応できるように学習者が準備することである (World Readiness Standards 2014)。このようにコミュニケーション、文化、コネクション、比較、コミュニティの 5 つの分野に繋がりをもたせながら行うように奨励している(The National Standards Collaborative Board 2015)。日本の場合は文部科学省のアクションプラン「戦略構想」を基に経済・社会等のグローバル化が進展する中、子供達が 21 世紀を生き抜くためには、国際的共通語となっている「英語」のコミュニケーション能力を身に付けることが必要であるという理念の基に、読む・書く・聞く・話すの 4 技能を伸ばすようにガイドラインが作られている (MEXT, 2003)(Tahira, 2012)。

3.6 学習者の見解

モチベーションについて見てみよう。外国語を習得する上では動機が非常に重要である。動機には外因性と内因性の 2 つがある。どちらの動機も必要だが、内因性の動機が特に言語習得には大事なようである (Sakurai, 2016)。また言語習得には学習者にとってどのくらい不安度が高くなる

かで左右される。例えば、あまりにも話す時に不安度が高くなると普段の実力が出ないこともよくある。不安に関してコミュニケーション、テストと受ける時の生じる不安、それから評価を受ける際に生じる不安もある。ある程度の不安を感じるのは言語教育には大事ですが、ありすぎても習得が妨げられる。これはアメリカの学生と日本の学生が不安を感じる状況についてまとめた物である。アメリカでは発音を間違える時、人前で発表する時などが挙げられている。日本では文化の違いにより生じる誤解、試験等で良い成績をとらなければいけないというプレッシャーや人前で間違えること等を気にして不安になる等があげられている (Horwitz, E. K., Young, D. J., & Gardner, R. C. 1991)。

3.7 インターカルチュラリティ

言語習得に大事な能力として最近注目が集まっているのがインターカルチュラリティである。これは、異文化をお互いに認め合い、その文化にあった表現を使うことができる能力である (Rollings-Carter, 2010)。インターカルチュラリティは言語能力が高くなるに従い、その国の文化に精通していくため母語話者のようにその国の文化にあった話ができるようになるのである。上級になるに従い言語と文化のギャップが少なくなる。インターカルチュラリティを外国語の授業内で学べるのが最適だが、やはり現実的には留学をしてその国で生活することでこの力がつく。しかし授業でもペンパルなどの交流は地域での活動を交えた内容等で自ずとその力がついていくように、指導していくことが大事である (Van Houten, 2016)。

4. 研究

1. 調査の対象

参加者は日本人の男子学生 16 人、女子学生 17 人、中性 1 人の 34 名、アメリカ人の男子学生 13 人、女子学生 16 人、中性 1 人の 30 名の合計 64 名でアンケート調査をオンラインで行った。

2. 研究方法

アンケート調査用紙を日本語とお英語で作成し、グーグルフォームを使ってオンラインでデータを収集した。いくつかの質問は Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986)、NCSSFL (2015) の先行文献を参考にした。

5. 結果

5.1. 研究質問 1 は: 「外国語教育について大学生はどのような経験があるのか」についての結果である。

5.2. 外国語教育に関する評価

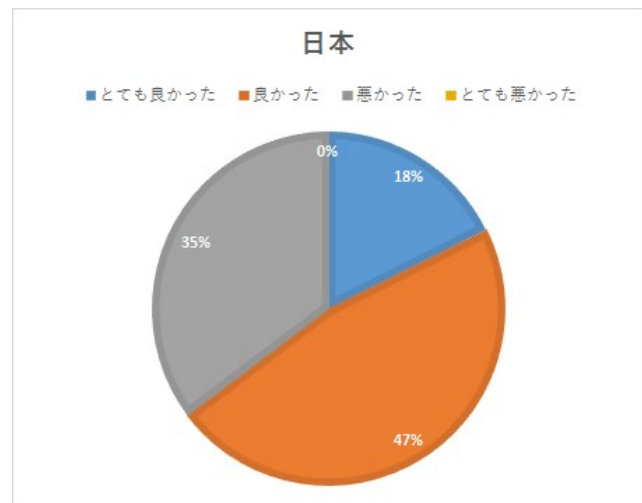
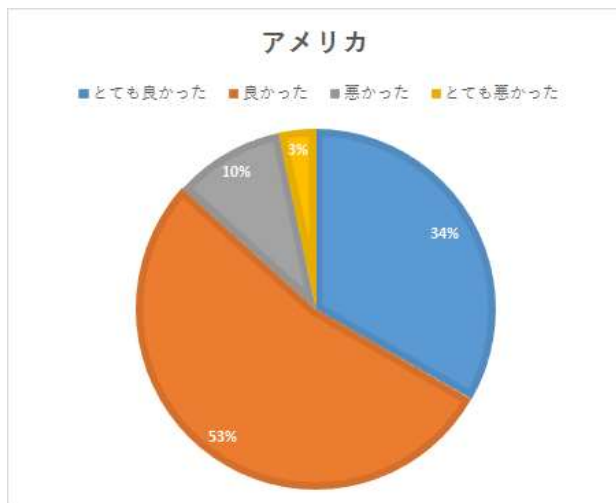
自分達が受けた外国語教育に関しては約 90%のアメリカの学生 (図 4 参照) と 65%の日本の学生 (図 5 参照) が外国語教育に対して前向きな経験を持っていたのに対し、3割以上の日本の学生が外国語教育に対して否定的な意見を持っていたことがわかった。

肯定的な意見としてアメリカの学生は「外国語の先生方が楽しく教えてくれるのであまりクラスでプレッシャーを感じない。」「実際勉強をするのが楽しかった」と答えていた。良い経験をしなかった理由には「スペイン語を学んだ最初の二年間、私の先

生はスペイン語をあまり理解していなかったなので、理解が深まらなかった」と言っている。日本人の学生の肯定的な意見としては「大学での英語の授業は会話もするので、おもしろかった」と答えていた。良い経験をしなかった理由には「文法中心で一方的な授業だったので退屈だった」とある女性の学生が答えている。

図 4：外国語教育に関する評価：アメリカ

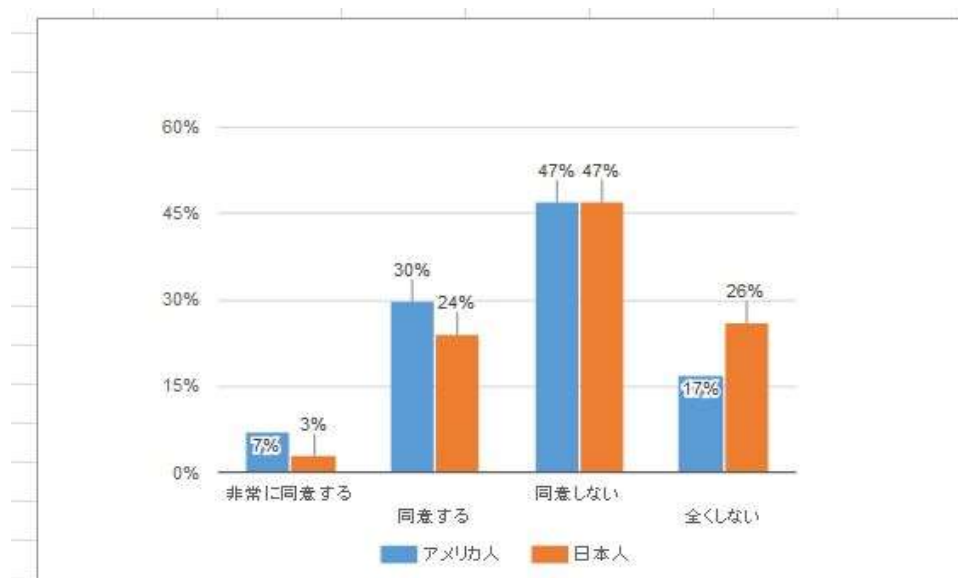
図 5：外国語教育に関する評価：日本



5.3. 否定的な評価に対する不安：先生への不安

否定的な評価に対する不安として、先生に間違いを直されることが不安に繋がるということは一般的に日米の学生共ないことがわかった（図 6 参照）。

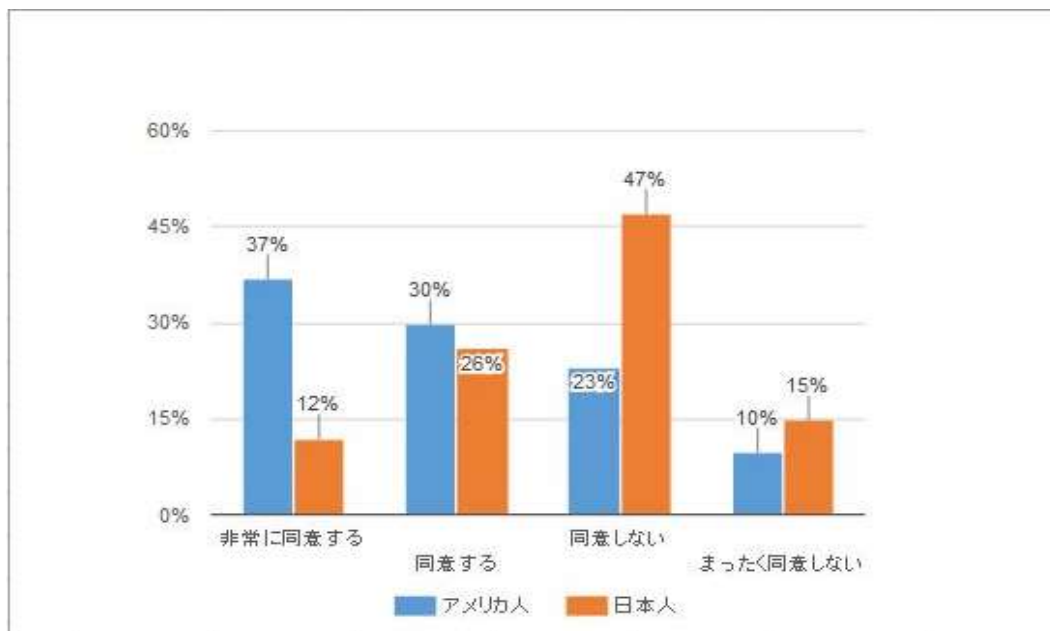
図 6：「先生に私の間違いを直されるのが怖い。」



5.4. 否定的な評価に対する不安：友人への不安

「他の学生の方が自分よりすぐれているのではないか」という不安に対しては、約 70% のアメリカ人の学生が他の学生の方が自分より優れていると答えている。その一方約 60% の日本人の学生はそうは思わないと答えた（図 7 参照）。

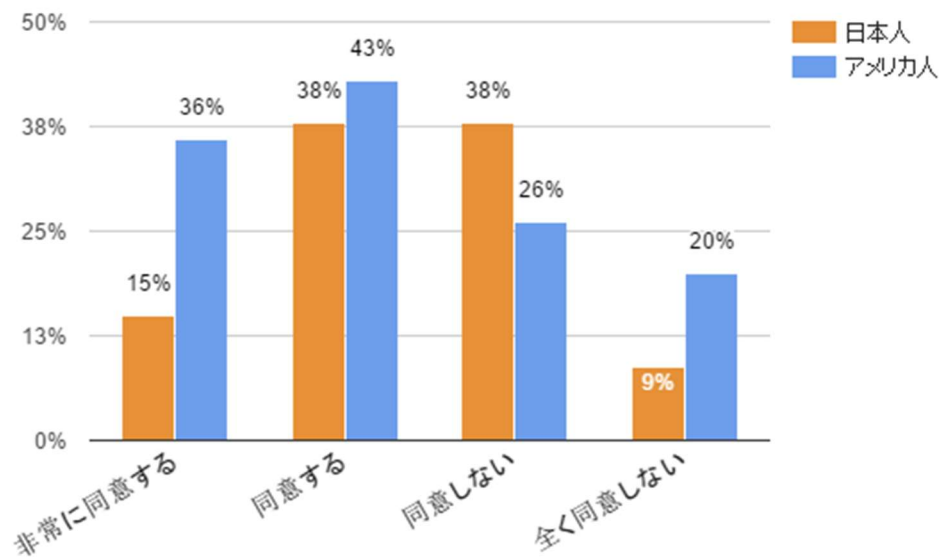
図 7：「他の学生の方が私より優れている。」



5.5. テストに関する不安

「試験でいい成績を取るため、プレッシャーを感じるか」という質問には 80%のアメリカ人学生は (53%の日本人の学生と比べて) 「試験でいい成績を取るため、プレッシャーを感じる」と答えた(図 8 参照)。

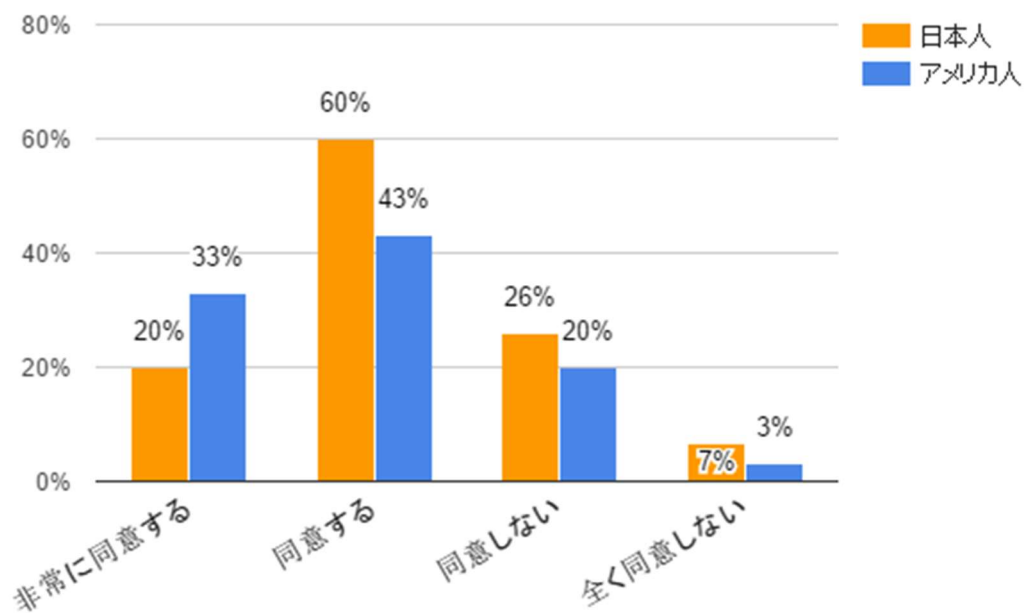
図 8 : 「試験でいい成績を取るため、プレッシャーを感じる」



5.6. コミュニケーションに対する不安

「授業中に準備しないで話さなければいけない時、うろたえてしまう」という質問には 80%の日本人の学生と 76%のアメリカ人の学生が「授業中に準備しないで話さなければいけない時、うろたえてしまう」と答えた（図 9 参照）。

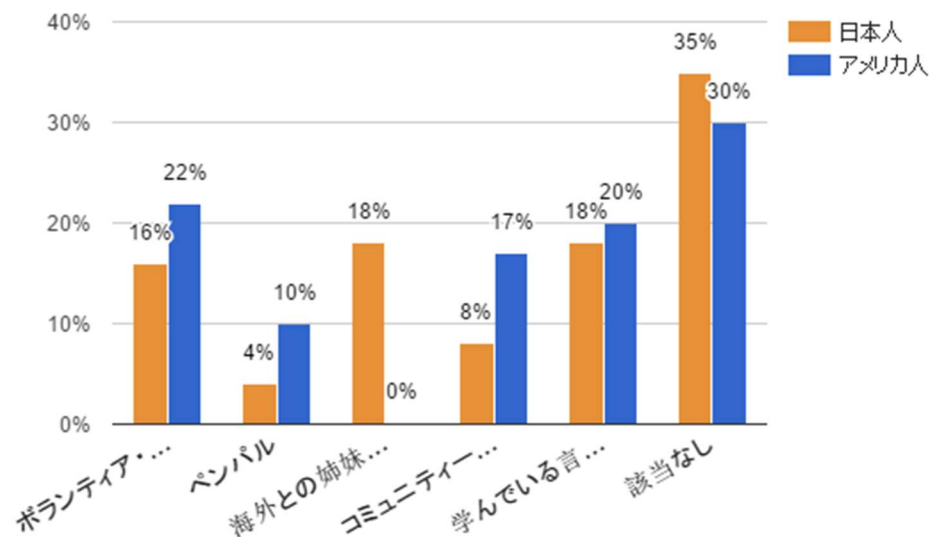
図 9：「授業中に準備しないで話さなければいけない時、うろたえてしまう。」



5.7. 地域に関するプロジェクト

ACTFL President Van Houten のリサーチを基に、ボランティア・サービスラーニングやペンパル、海外との姉妹交流やコミュニティイベントに参加すること（例：祭り）そして学んでいる言語と関係のある場所を訪れること（例：レストラン）がインターカルチュラリティを向上させる良い方法だということが分かった。また、私たちの研究調査からの「外国語の授業で、プロジェクトなどをしたことがあるか」という質問には 70%のアメリカ人と 65%の日本人が一つ、又はそれ以上の地域に関するプロジェクトに参加したことがあると答えた（図 10 参照）。

図 10：外国語の授業で、プロジェクトなどをしたことがありますか。



5.8. 研究質問 1 のまとめ

アメリカの学生の方が日本の学生より外国語の授業では肯定的な経験を持っていることがわかった。その理由として先生が良かったから、授業で会話ができただけから等の理由をあげている。否定的な理由としては、日本の場合、書く・読む・聞くに焦点がおかれ、話す力が伸びないこと等があげられた。また不安度に関しては、外国語の授業ではアメリカ人の方が日本人よりクラスメートと自分を比較したり、テストへの不安があることが分かった。驚いたことは、日本人もアメリカ人も外国語の授業には地域とつながったプロジェクトを取り入れていたと答えたことである。

5.9. 研究質問 2:外国語は、異文化に対する知識をどのように言語を通して深めるのか。

6.0. 外国語クラスのレベル

今まで自分の国で取った外国語のクラスの最も高いレベルは、アメリカ人の大半は中級レベル（図 11 参照）、日本人の大半は上級レベルの授業を取っていたことが分かった（図 12 参照）。

図 11：外国語クラスのレベル：アメリカ

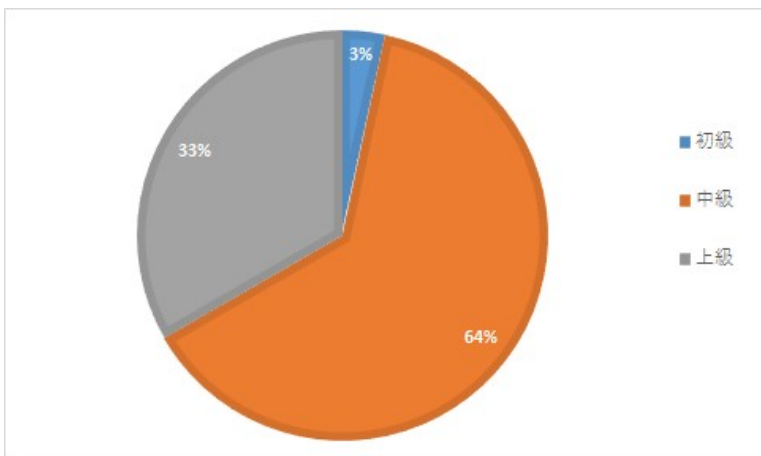
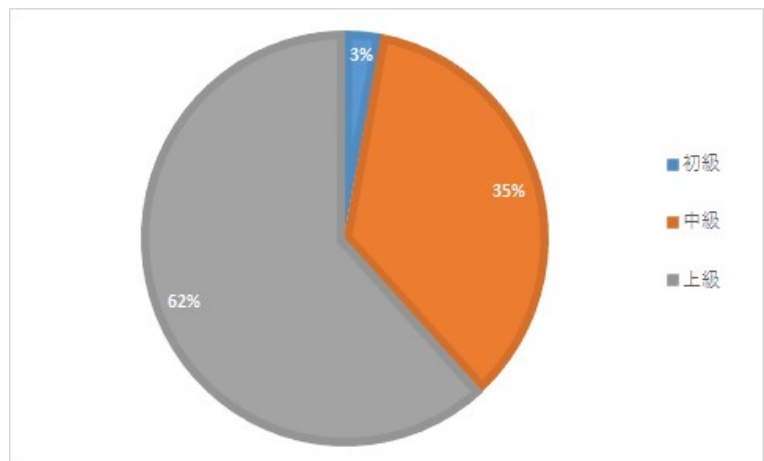


図 12：外国語クラスのレベル：日本



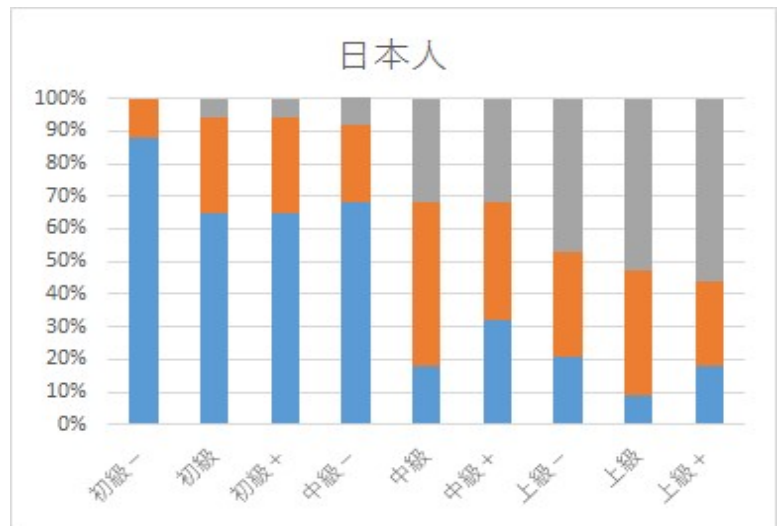
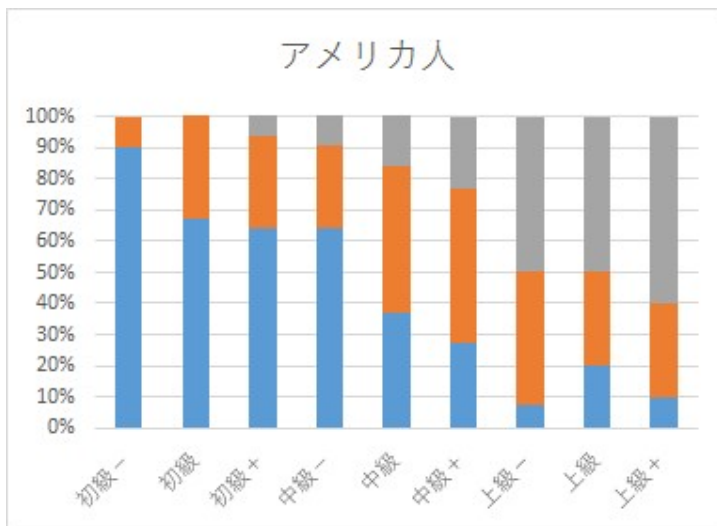
6.1. 外国語能力：プロフィシエンシー

次は外国語のプロフィシエンシーに関する質問の結果である。質問の難易度は初級から上級まで ACTFL のプロフィシエンシーガイドラインを基にした「自己能力評価」をもらった。また、言語教育の現場において、各学年や学期ごとの目標の記述、全体的自己評価や教師による評価のために使うチェックリスト、タスク達成評価に使われている ACTFL と NCSSFL の Can-do statement を行った。

外国語能力の自己評価に関しては、アメリカ人も日本人も自己能力評価に関しては初級の下から中級の下が多いという同じようなレベルに自己評価した（図 13 参照）（図 14 参照）。

図 13：自己能力評価の結果：アメリカ

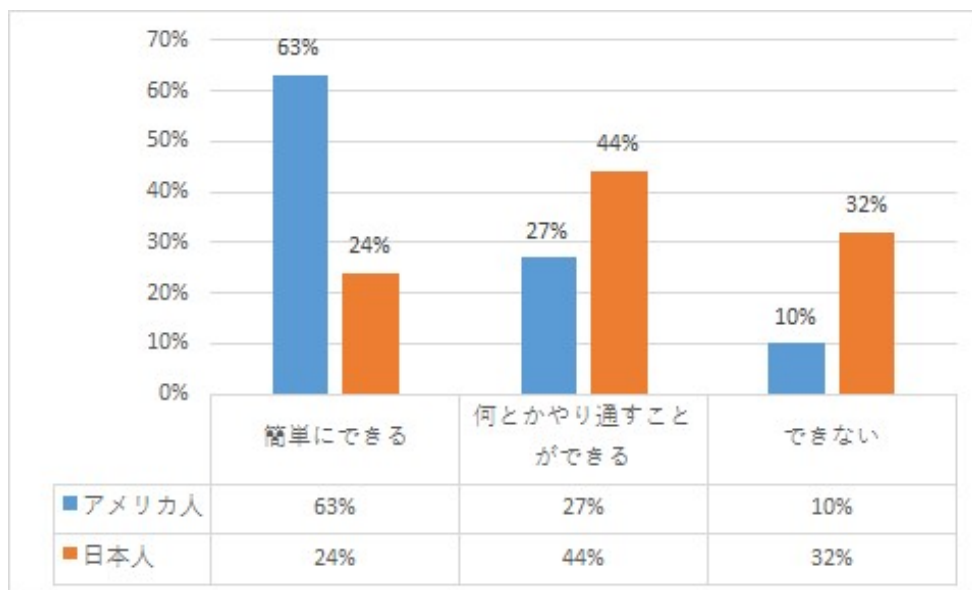
図 14：自己能力評価の結果：日本



6.2. インターカルチャリティ: 招待を受けたり断ったりできる

アメリカの学生は日本の学生に比べて外国語で招待を受けたり断ったりする事に自信を持っているようである（図 15 参照）。

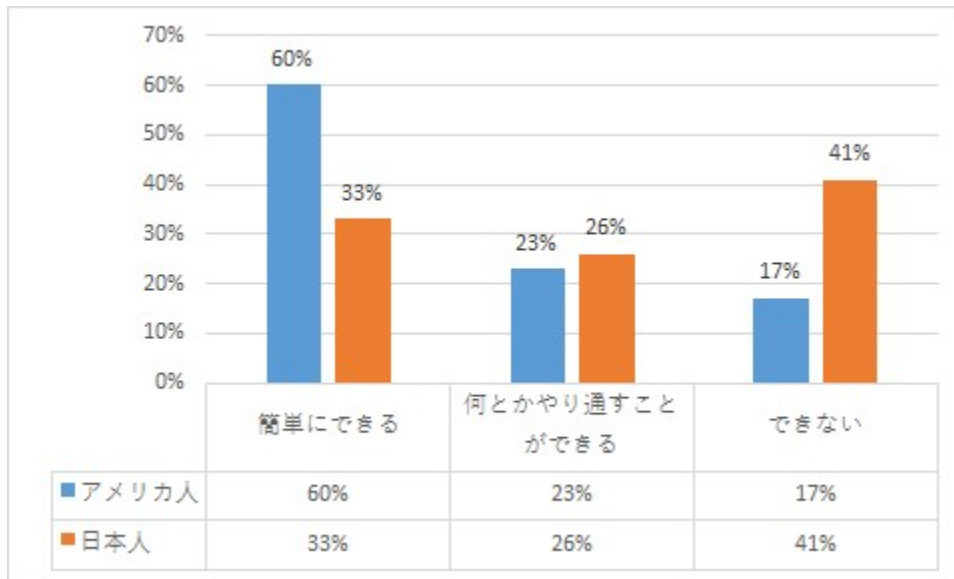
図 15：通常、その国の文化に即した方法で招待を受けたり断ったりできる。



6.3. インターカルチュラリティ：贈り物をあげたり、受け取ることができる

「その国の文化に即した方法で贈り物をあげたり、受け取ったりすることができるか」という点に関して、日本人よりアメリカ人の方が、外国語を用いて贈り物をあげたり受け取ったりする事に自信を持っていることが分かった（図 16 参照）。

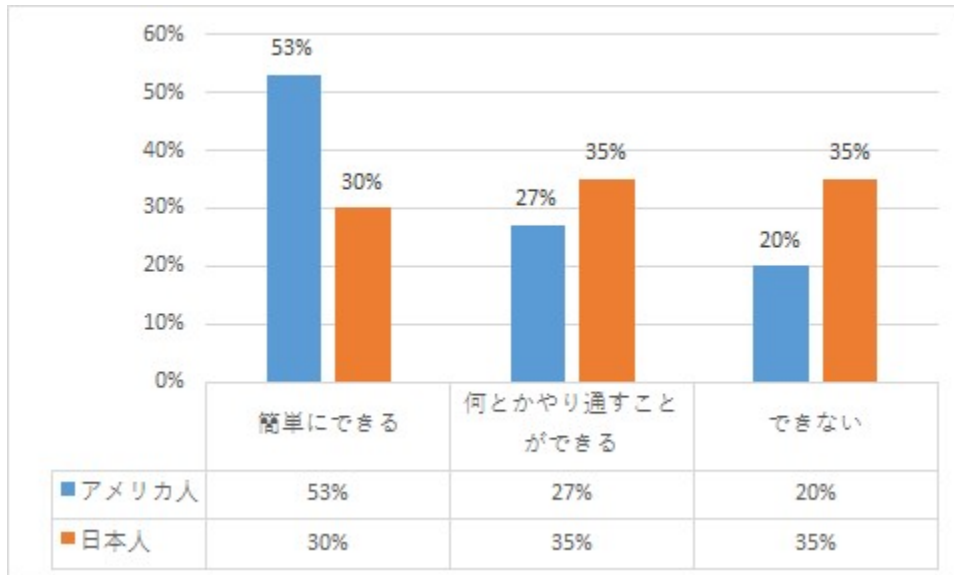
図 16：その国の文化に即した方法で贈り物をあげたり、受け取ることができる。



6.4. インターカルチュラルリティ：会話をする際のマナー

会話をする際その国に即したボディランゲージを使ったり、うまく話のやりとりをしたり、会話をさえぎったり、同意したりすることができるだろうか。これに関しては日本人よりアメリカ人の方が、自身を持っている(図 17 参照)。

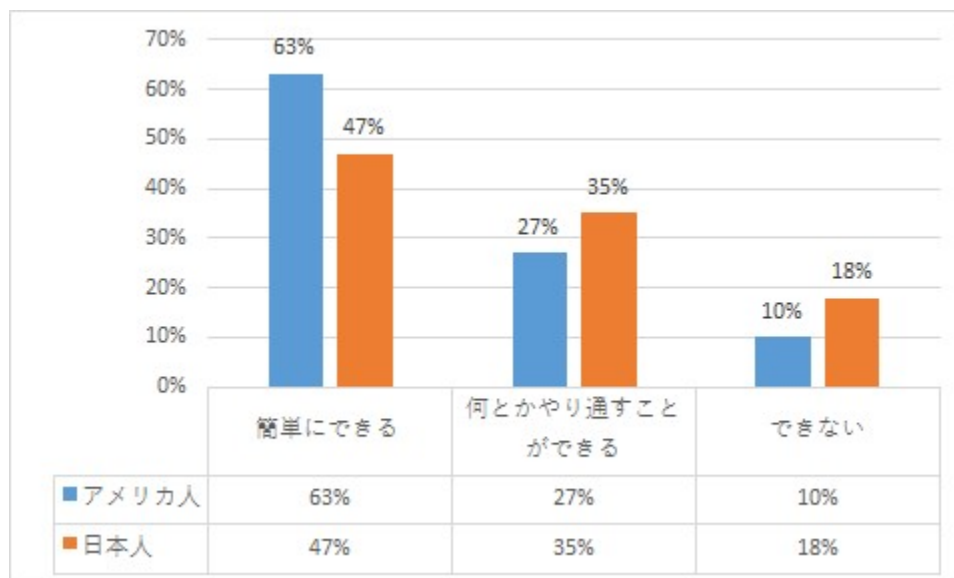
図 17：その国に即したボディランゲージを使ったり、うまく話のやりとりをしたり、会話をさえぎったり、同意したりすることができる。



6.5. インターカルチュラルリティ:その他のマナー

誰かがくしゃみをした時、乾杯をする時、また、褒めてくれた時など、その国の文化に即した方法で対応することができるかについては日本人よりアメリカ人の方が、上手く対応できるという自信を持っている（図 18 参照）。

図 18：誰かがくしゃみをした時、乾杯をする時、また、褒めてくれた時など、その国の文化に即した方法で対応することができるか。



6.6. 研究質問 2 のまとめ

日本人の学生の方が上級レベルまでの授業を取っているのに比べ、アメリカ人の学生の大多数は中級レベルの授業までしか取っていないにも関わらず、外国語の能力の自己評価が同じレベルになったことは興味深い結果だった。つまり、アメリカ人の学生と日本人の学生の「話す」能力は似たようなレベルに評価されたのは、日本の外国語の授業はまだコミュニケーションを重視した教授法を取り入

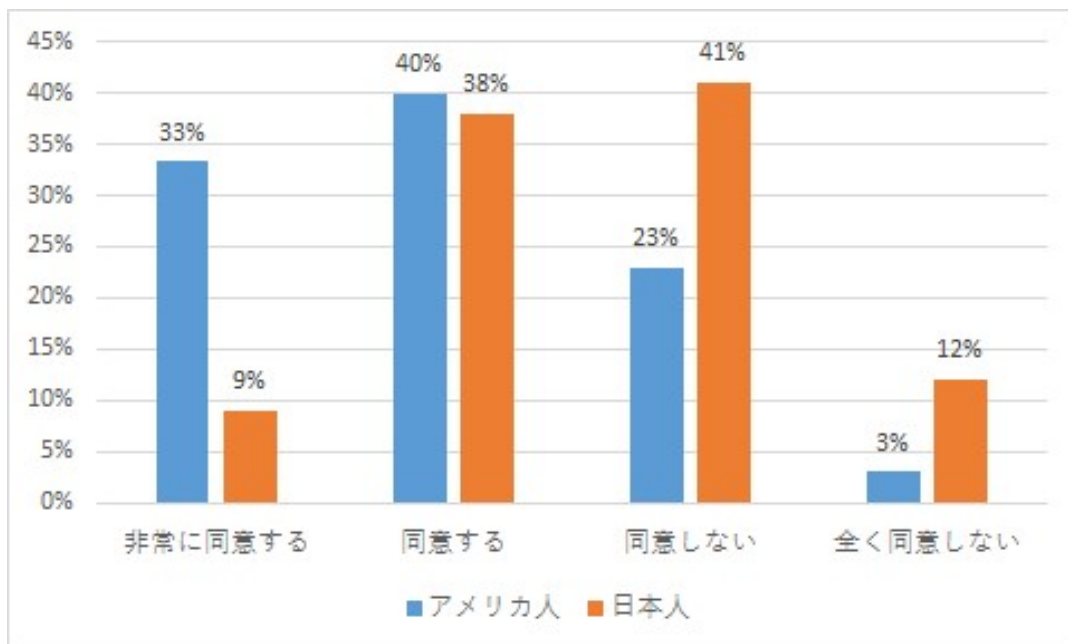
れていないというリサーチを裏付けている。私たちが調査を通して得たことは、インターカルチュラリティにおいて自信を持っている日本人が少ないということであり、これが実際の社会で適切に外国語を用いる事が難しいことを示している。

6.7. 研究質問 3:外国語教育は学生と多文化社会を繋げるためにどのような役割を果たしているのか。

6.8. 多文化社会のコミュニティと繋がり

ここでは、約 70%のアメリカ人が外国語教育によって多文化コミュニティとつながりを持つことができた同意したのに対し、約 50%の日本人は同意しないと回答した（図 19 参照）。

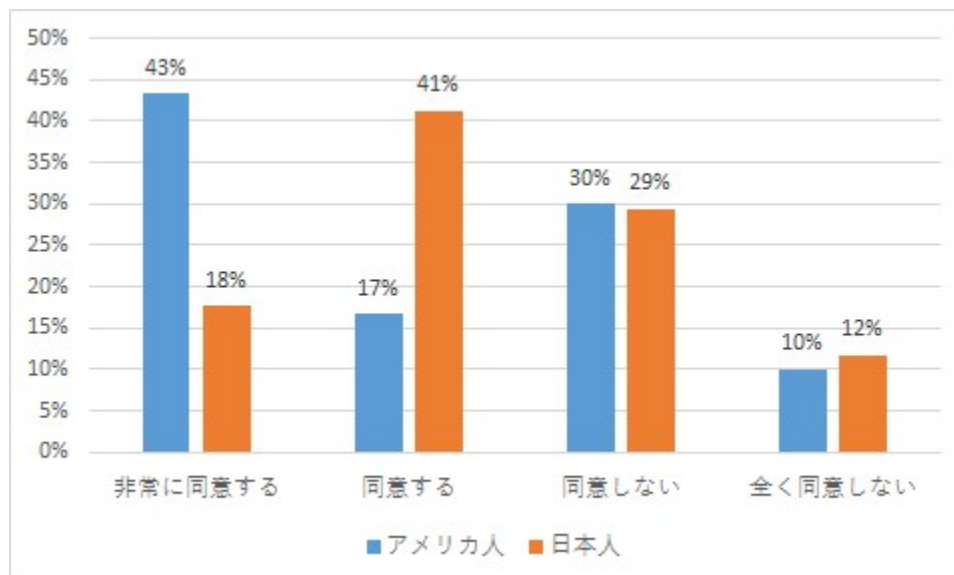
図 19：多文化コミュニティと関係を築くことができる。



6.9. 外国語教育と母語話者との繋がり

60%のアメリカ人の大学生と 59%の日本人の大学生は学んでいる言語の母語話者との関係を築くことができると同意した。しかし、アメリカ人の大学生の方が日本人の大学生より非常に同意すると回答した割合が多かった（図 20 参照）。

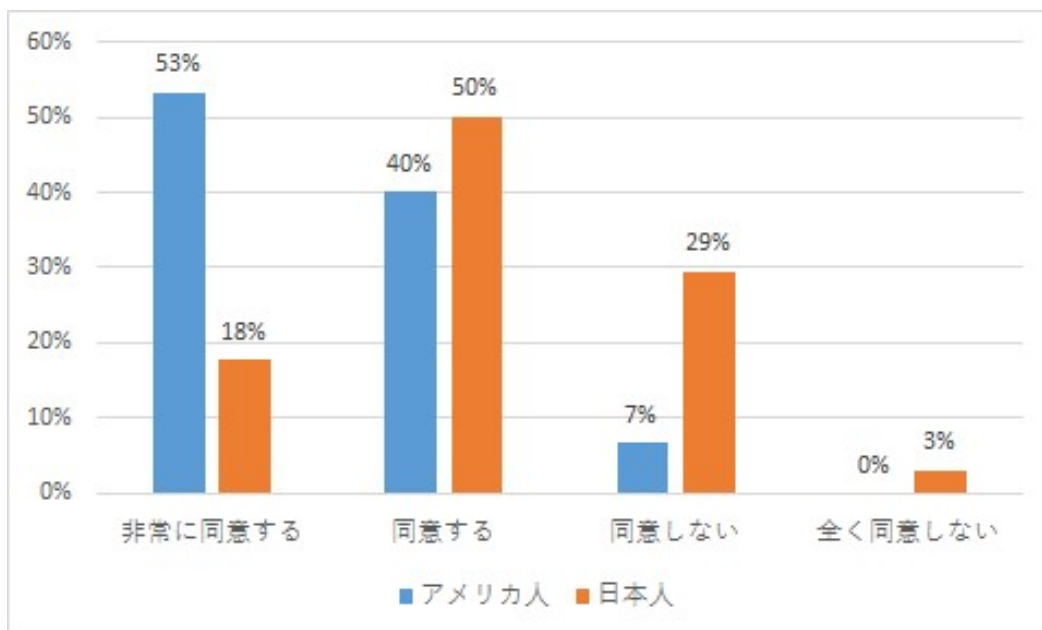
図 20：外国語教育は学んでいる言語の母語話者との関係を築くことができる。



7.0. 他の文化への理解

93%のアメリカ人が外国語教育が他の文化をより深く理解するのに役立つと回答した。一方、68%の日本人も同じように回答した（図 21 参照）。

図 21：他の文化やその文化の人を受け入れ、理解することができる。



7.1. 研究質問 3 のまとめ

ここで研究質問 3 をまとめると、大半のアメリカ人は外国語教育を通して多文化社会とつながりを持てたと認める一方、日本人の意見はほぼ二分化された。一般的に、日米の学生が感じたことは、彼らが母語話者と同程度 of 関係を構築できたということであり、アメリカ人はそれをより強く感じていた。おそらくこのことは、外国語が交流の幅を広げるとともに、調査の対象とした学生が概して良好な留学制度を持つ大学に通っているからだ と推察される。日米の学生は外国語教育のおかげで、より他の文化を理解し、受け入れるようになったことに賛同するのに対し、7%のアメリカ人と 32%の日本

人がこれに反対した。このことは、アメリカでの外国語授業における対話と他文化理解を重視していることに因るのかもしれない。

7.2. 結論

アメリカ人の方が日本人よりインターカルチュラリティに高い自信を示すのは、熱意のある教師の存在や、対話と他の文化理解を重視すること、対象言語の話者と多文化社会との強いつながりがあるからだと考えられる。また、必ずしも外国語を使う際の不安が、外国語教育に伴う学生の良い経験、もしくは悪い経験を左右するというわけではない。むしろ、教師と授業内容が決定要因となっている。

日本人はアメリカ人に比べて多文化社会とのつながりが薄いと考えられるが、日本人は単一民族国家であり、多文化社会に接する機会が少なく地域の多文化社会に関してプロジェクトの発展に繋がらない可能性があると考えている。したがって、授業を通じた多文化かつ多言語社会との関係を持つ機会を生み出し、実際に対象言語が用いられている社会で使う機会を提供することによって、授業での経験がより肯定的なものとなり、インターカルチュラリティが増すだろうと考えらる。

7.3. 研究の限界点

この研究の限界点として、参加者全員がカリフォルニア州からであること、また、大半の日本人はアメリカに留学中の学生や、私たちが日本に留学中に出来た友人であるため、この結果は一般化出来ない。そして、ここでは中級レベルのタスクに基づいてデータを分析をした。

7.4. 将来の研究課題

将来、大学と、高校での多文化社会やインターカルチュラリティの学習をわけて調査してみたい。そうすることによりそれぞれのレベルでどのようにインターカルチュラリティを習得するかその過程が詳細にわかるだろう。

参考文献

- Can-Do Statements – NCSSFL. (n.d.). Retrieved May 05, 2016, from <http://ncssfl.org/linguafolio/ncssfl-actfl-collaboration/>
- Dornyei, Z. (1990). Analysis of Motivation Components in Foreign Language Learning.
- Fast, T. (2014, November 15). We're Going Global?! A Look at Local Efforts to Implement Japanese National Education Goals. Retrieved November 17, 2015.
- Horwitz, E. K., Young, D. J., & Gardner, R. C. (1991). Language anxiety: From theory and research to classroom implications. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- How Does Extrinsic Motivation Influence Behavior? (n.d.). Retrieved March 31, 2016, from <http://psychology.about.com/od/eindex/f/extrinsic-motivation.htm>
- Intercultural Can-Do Competencies – NCSSFL. (n.d.). Retrieved May 05, 2016, from <http://ncssfl.org/resources/intercultural-can-do-competencies/>
- MEXT. (2002, July 12). 「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について. Retrieved May 14, 2016, from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm
- MEXT. (2011). Survey on the Five Proposals and Specific Measures for Developing Proficiency in English for International Communication. Retrieved May 14, 2016, from <http://www.mext.go.jp/english/elsec/1319701.htm>
- Number of Japanese studying abroad down seventh straight year | The Japan Times. (n.d.). Retrieved April 08, 2016, from <http://www.japantimes.co.jp/news/2014/03/25/national/number-of-japanese-studying-abroad-down-seventh-straight-year/#.VwfV5no7fCs>
- Ovando, C. (2003). Bilingual Education in the United States: Historical Development and Current Issues. *Bilingual Research Journal*, 27(1). Retrieved November 18, 2015.
- Paran, A., & Sercu, L. (Eds.). (2010). *New Perspectives on Language and Education: Testing the Untestable in Language Education*. Clevedon, GBR: Multilingual Matters. Retrieved from <http://www.ebrary.com>
- Rollings-Carter, F. (2010). What is interculturality? Retrieved December 16, 2015, from <http://www.learnnc.org/lp/editions/linguafolio/6122>
- Sakurai, R. (2016, February 9). Motivation モチベーション. Retrieved April 14, 2016, from <http://www.everywherepsychology.com/p/motivation.html>
- Tahira, M. (2012). Behind MEXT's new Course of Study Guidelines. *The Language Teacher*. Retrieved March 26, 2016.

- Terrill, L. (2014). Effective Lesson Design: Making Every Minute Count. Retrieved December 16, 2015, from <https://lauraterrill.wikispaces.com/Presentations>
- The Advanced Placement Program(AP): An International Program A Global Credential. 1st ed. 2016. Web. 7 Apr. 2016.
- The Benefits of Second Language Study. (2007). *NEA Research*. Retrieved from [http://www.sde.ct.gov/sde/lib/sde/PDF/Curriculum/Curriculum_Root_Web_Folder/Benefit ofSecondLanguage.pdf](http://www.sde.ct.gov/sde/lib/sde/PDF/Curriculum/Curriculum_Root_Web_Folder/Benefit%20of%20SecondLanguage.pdf)
- The National Standards Collaborative Board. (2015). World-Readiness Standards for Learning Languages. 4th ed. Alexandria, VA: Author. - See more at: <http://www.actfl.org/publications/all/world-readiness-standards-learning-languages#sthash.HPz1IC3T.dpuf>
- Van Houten, J. (2016). Moving through the levels of interculturality—a visual representation [PowerPoint presentation].
- Warner, I. (2014). English Language Proficiency Testing in Japan. 113-124. Retrieved from <http://kiui.jp/pc/kiyou/kiyou-no25/honbun/11.pdf>
- Wetzel, P., & Watanabe, S. (1998). Assessing Second Language Proficiency in an American University.
- What Is Intrinsic Motivation? (n.d.). Retrieved March 31, 2016, from <http://psychology.about.com/od/motivation/f/intrinsic-motivation.htm>
- World Language Content Standards for California Public Schools: Kindergarten through Grade Twelve. (2010). Retrieved November 17, 2015.
- World Readiness Standards for Learning Languages. (2012). Retrieved November 17, 2015.